

受験番号

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。 ※選んで答える問題は、記号で答えなさい。
 ※特にことわりのないかぎり、句読点やかきかっちはすべて字数にふくみます。
 ※設問の都合上、本文に一部省略があります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

君たちが使っている教科書にはまだ記述はないのだが、チンパンジーと分かれて二足歩行をはじめたこの時点では、ヒトの祖先は平原ではなくまだ森林で生活していた、と最近の研究で考えられている。ひと昔前までは、ヒトは生活の場を森から平原に移し、その影響で二本足で歩くようになったとされていたのだが、森での生活の時点ですでに二本足で歩いていたことがわかった。

1 この頃の類人猿は、二足歩行をしつつ、木登りもできるような体つきをしている。
 森林からサバンナに出た彼らを待ち受けていたのは、大変に過酷な生活環境であった。まず、水がほとんど存在しないのだ。水場がところどころに点々としかないのも、水場から水場へ歩いて移動するにも長距離を移動しなくてはいけない。そして気温が高いので、汗をどんどんかいて体温調節をする必要がある。この環境のために、彼らは体毛を失い、代わりに汗をかくための汗腺という器官が増えたと考えられる。600万年前、チンパンジーと分かれたばかりの頃はまだ毛むくじゃらだったはずで、本当に毛をなくさなければいけなくなったのはサバンナに進出した200万年前ぐらいからであろう。

次に、3 食べ物の問題がある。それまでは樹木が生い茂る森で、木々の葉っぱや果実をもぎとって食べていればよかった。しかし、サバンナにはヒトが簡単に手に入られるような食料は、ほとんどない。シマウマのような、タンパク質の塊ともいえる草食動物が多く生息しているが、ヒトは肉食動物ではない。肉食動物はつめやきばを持ち、ほかの動物を食料にできるが、木の上で暮らしていた霊長類が簡単にほかの動物を狩ることはできなかった。では、植物はというと、こうした過酷な場に生息する植物は水分をあまり含んでおらず乾燥しているものが多い。また、外側の殻が硬かったり、水分を含む実の部分は地中に埋もれていることがほとんどである。そうした実をとるためには地面を掘らなくてはならないが、器用さを重視した手なので、つめで掘り進むこともままならなかった。

では、彼らはこの難局にどう適応していったのか。一つは、食料を確保するために、自然を利用して非力さをカバーする道具を製作し、活用することを覚えた。石器を使つての狩りや、食物の採取である。

そしてもう一つ、目標のために役割分担し共同作業を知ったのである。それまでのように、一人ひとりが群れの中で勝手に暮らすのではない。群れという組織において、互いが自分と相手の果たすべき役割を理解し、目標達成のために何をするかを考え、いっしょに行動する。群れ全体が自分の立ち位置と役割を意識する集団となり、こうした社会関係の理解こそが、類人猿とは異なる、ヒトをヒトたらしめた最大のA になったのだ。このときを契機として、ヒトの脳は著しく進化する。やがてヒトは、ほかの動物と比べて格段に大きな脳を持つようになった。これは過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要なB だったといえるだろう。

実際に脳の大きさを比較してみると、チンパンジーの脳の容量が約380ccであるのに対し、ヒトは約1400ccある。しかも、進化の過程で単純にチンパンジーの脳がそのまま大きくなったということではなく、目の裏側の部分から頭のとっぺんにかけて、おでこ周辺にある5 前頭前野という部分が特に大きくなっているのだ。

その前頭前野とは、何を司る部分なのか。脳の働きは解析されてきたが、前頭前野にあたる部分がどのような機能を持っているかは長年わからなかった。近年ようやく、前頭前野は「自分を客観的に見る」感覚を司っていることがわかってきた。自分が何を、何を感じているか。そして他人が何を思い、どう感じているか。自分の気持ちを参照しながら、相手が何を感じ考えているかを知るための器官なのだ。また、自分が何を欲しているかということもモニターしているので、それと連動して、目標を達成するために、次に何をしなければいけないかといった物事の優先順位を決める役割もある。

これは言語能力などとは別々に管理されており、例えば事故で前頭前野を損傷してしまっても、言葉や記憶、思考には問題ない。しかし、他人の気持ちを読み取れなくなったり、次にすべきことの判断ができず、何かをしようという意欲もわなくなってしまう。

6 前頭前野の働きをほかの霊長類と比較すると、サバンナに出て環境に適応したヒトが、他人の心を読んで共同作業をし社会生活を営むようになった、という進化の過程がわかるのである。

まだ正確にはわかっていないが、7 二回目に脳が発達した時期は、ホモ・サピエンスがアフリカ大陸からユーラシア大陸に進出していったときと重なっており、このことが秘密を解く手がかりになるかもしれない。20万年前、アフリカ大陸から陸地を伝って

新しい世界へ進出したヒトは、世界各地に散らばり広がっていった。かつて森からサバンナに進出したときのように、それは大きな困難を伴ったことは想像に難くない。

そうしたリスクを冒してまで、⁸なぜ彼らは外界に出て行ったのか。今よりもはるかに人口が少ない時代であり、アフリカ大陸にヒトが増えすぎて飽和状態になった、ということも考えにくい。

私は、その要因は、好奇心ではないかと思う。脳が大きくなることにより、ヒトは物事の因果関係をより深く考えるようになった。すると、今自分たちが生活している世界を客観視することができるようになり、同時に、さらに外の世界には何が広がっているのか、と考えるようになる。そうした冒険心から、彼らは別の大陸へ渡っていったのだと、私は考えている。それは、現在も我々が宇宙という空間に思いをはせ、ステーションを建設し、惑星を探索することと同じなのではないだろうか。

これまで、チンパンジーなどの比較を⁹中心に、アヒトがイどのようにウ変化し今にエ至ったのかをオ見てきた。最後にもう一つ、ヒトが脳を発達させ、社会性を身につけたと同時に変化した、「子ども」の在り方について話したい。

ヒトは大きな脳を持つようになったが、それだけの脳機能が育ち一人前の生物になるまでに、ほかに類を見ないほどの時間とコストがかかるようになった。お産をこれ以上負担のかかるものにできないため、最初から頭部を大きくして産むことはできない。あくまでも、これまでどおりの状態で産み、大きく育て上げていかなければならないのである。

ある心理学者が、チンパンジーの赤ちゃんと同じ年の自分の子どもを、同じ環境でいっしょに育てたらどうなるかという実験をしたことがあった。毎日、同じように話しかけ、同じ物を食べさせ、その発達の違いを比べたのだ。最終的には、ヒトと同じ環境で育てても、チンパンジーはやはりチンパンジーにしかないという結果が出た。

チンパンジーは4年程度で離乳し、その後は移動も自分一人で行えるようになるし、果実をとることもできるようになる。暖かい熱帯降雨林の中で、ただ果実や葉っぱをとってはいればいいから、独力で暮らせるし、そのまま一人前になり自立し、面倒をみる必要もなくなる。それに対してヒトは、3年ほどで離乳はするが、6歳になるまで奥歯すら生えてこないから食事も満足にできず、7歳ぐらいまでは大人と同じようには歩けない……。離乳したら一人前、とはいかないのである。

ヒトは、何歳で一人前になるのか。森に暮らし狩猟をして生活している部族の間でも、一人前として独立が認められるのは18〜20歳になってからといわれる。日本で大学院に通っている子たちも、さまざまな面で親に頼って生きている人が多いことを考えると、現代では25歳ぐらいまで、周りのサポートが必要といえるだろう。

【X】現在のヒト社会は相互に補助しあう中で、技術や文化が発達し、類人猿であった頃からは考えられないような、多様な道を切り開いてきたのだから。

チンパンジーと別の道を歩んで以降、ヒトは他者の気持ちを読み、力を合わせて共同作業をすることを覚えた。これがヒトの強みであり、大切な部分なのだと、君たちにはもう一度理解してほしい。すると、自分がこれまで社会に支えてもらって生きていたことに気づくだろう。そして、次は自分が社会を支えていこう、支えなければいけないんだという思いが見えてくるのだ。それこそが、Cになる、ということではないかと私は思う。

(長谷川眞理子『ヒトはなぜヒトになったか』より)

※類人猿……ヒトの祖先にあたるサル。

※サバンナ……雨が少ない地帯の草原。

※過酷……度を超えて厳しいさま。

※霊長類……ヒトや類人猿をふくむ動物の分類。

※契機……きっかけ。

※参照……比べて参考にすること。

※モニター……監視。点検。

※ホモ・サピエンス……人間を表す学名。

※リスク……危険。

※飽和状態……最大限に満ちた様子。

※コスト……費用。

1 ――― 1 「この頃」とありますが、いつのことですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア ヒと昔前 イ 600万年前 ウ 200万年前 エ 20万年前

2 ――― 2 「汗腺という器官が増えた」とありますが、このように変化した理由を述べた一続きの二文を探し、初めの五字をぬき出して答えなさい。

3 「食べ物の問題」とありますが、

(1) ということが問題なのです。次の空らんに適することばを答えなさい。
食料が(九字)ということ。

(2) この問題の解決方法は何ですか。本文から十五字以内で二つぬき出して答えなさい。

4 「ままならなかった」とはどういう意味ですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア できればしかなかった イ 完成させられなかった ウ 上手にはできなかった エ 思い通りになかった

5 A に入る語として最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 合流点 イ 折返点 ウ 分岐点 エ 終着点

6 B に適する二字のことばを、本文からぬき出して答えなさい。

7 「前頭前野という部分が特に大きくなっている」とありますが、なぜこのようになったのですか。次の空らんに合うように、本文のことばを使って答えなさい。ただし、前頭前野の働きを明らかにして答えること。

サバンナに適応するには、(四十五字以内) 前頭前野を発達させる必要があったから。

8 「前頭前野の働き」とありますが、前頭前野が働く例として最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 卒業アルバムを見て憶れていた先生のことを思い出す。

イ クラシック音楽を聴いて、リラックスした気分になる。

ウ 先生に怒られて、沈みこんでいる友人を、なぐさめる。

エ 休み時間に、図書室で借りた本を黙って読んで過ごす。

9 「二回目に脳が発達した時期」とありますが、「一回目」と「二回目」の「時期」にはどのような共通点がありますか。「〜とき。」に続く形で、本文から十字でぬき出して答えなさい。

10 「なぜ彼らは外界に出て行ったのか」とありますが、その理由を筆者はどのように考えていますか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 今の生活環境と比べて、まだ見たことのない場所はどうか興味を持つようになったから。

イ 物事の因果関係を深く考えるようになったので、自分たちの起源を知りたいと思うようになったから。

ウ 前頭前野が発達するにつれて、今よりもさらに広い生活空間を確保したいと欲するようになったから。

エ 自分たちが生活している場所の様子を、別的大陸から客観的に見てみたいと考えるようになったから。

11 「中心に」はどこにかかりますか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

これまで、チンパンジーなどとの比較を中心に、ア ヒトが イ どのようウ 変化し今に エ 至ったのかを オ 見てきた。

12 「X」には次のア〜オの文が入ります。正しく並べかえなさい。ただし、四番目には「オ」が入ります。

ア しかし、長期にわたり複雑な多くの物事を教えなければならぬ現代社会では、子育てを社会全体が担わなければならない。

イ だからこそ、ヒトは社会全体で子育てを行うようになったのだ。

ウ 社会とは、例えば学校や近所の大人、会社である。

エ ヒトは、大きくすぐれた脳を手に入れた反面、一人前になるまでに長い期間を要するようになった。

オ もちろん、子育ての中心には子どもの親や身近な人々がいる。

13 C に適することばを、六字で答えなさい。

14 次のア、イについて、本文の内容に合うものにはA、合わないものにはBと答えなさい。

ア 森林で暮らしていたヒトの祖先は、二足歩行をするものの全身がサルのように毛でおおわれていたが、平原に進出していったことでその毛を失っていくこととなった。

イ サバンナを出て行ったヒトは、過酷な生活環境に立ち向かうために、脳全体を大きく発達させて、相手に自分の意志を伝えるための言語能力を身につけていった。

ウ ヒトが自分たちの生活していた場所から外の世界に出て行った理由は、現在の環境の不便さを理解し、よりよい生活環境を求める意欲が生まれてきたからである。

エ チンパンジーは、たとえヒトといっしょに同じ環境で育てられ、同じ教育を受けても、その発達の度合いや独立するために必要な期間はヒトと同じにはならない。

オ 道具の製作によって生き残ることが容易になったヒトは、生活に余裕ができたので、他人の立場を思いやりたり相手のために親切な行動をとったりするようになった。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

エンジンは今日も快調だった。

最初に向かったのは、宿からほど近いところにある、石川県小松市の『日本自動車博物館』だった。ここに表敬訪問というかたちで立ち寄るらしい。

この博物館には、野球ができそうなくらいの駐車場があった。しかも ¹驚いたことに、そのど真ん中に、ボクによく似た白いボンネットバスが停めてあったのだ。

「おお、あれは一九六八年に作られたはずBXD三〇だよ。この博物館もがんばっていてな、いまでもアレを年に何度か走らせているらしいんだ」

と、高井専務が満面の笑顔を^{えがお}つくり、となりの高橋部長に「つくづくマニアだね」と笑われていた。

広大な駐車場に、ボクとBXD三〇がびったり並べて停められた。博物館にやってきた人たちは、館内に入る前に、まずボクたちのところで足を止めて、さわたり乗ったりするものだから、あつというまに人だかりができてしまった。

「ここでもボクは、たくさんの人たちから笑顔を向けられた。」

約二時間後――、記念撮影^{さつえい}をして、²キャラバン隊は出発することになった。今度は能宗館長^{のうそう}がハンドルをにぎり、エンジンをかけた。

そして、まさに走りだそうとした刹那^{せつな}、背後からかすかに《声》が聞こえた気がしたのだった。

ボクは、ハッとしてBXD三〇に意識を集中した。

まさか……。

(きみは、いいな。しょっちゅう、動けて、いいな)

たしかに、そうだったのだ。

驚いた。³この博物館にも小さな奇跡^{きせき}が起きているのだった。福山以外で車の《声》を聞いたのは、彼^{かれ}がはじめてだ。でも、彼のなかの《魂》^{たましい}はボクよりはまだ薄弱^{はくじやく}で、走り去っていくボクが、別れの挨拶^{あいさつ}をしても、返事は届かなかった。

ボクはBXD三〇がくれた言葉の意味をぼんやりと考えながら、北陸自動車道に乗った。

この高速道路は見晴らしがよかった。

遠く左手に横たわる松林のさらに向こうには、濃紺^{のうこん}色のゼリーみたいにべったりと凧^ないだ日本海が見渡^{みわた}せた。久しぶりに目にする爽快^{そうかい}な海のブルーだった。しかもこの海は、大三島^{おほみしま}とは違って水平線を見渡すことができた。

ひたすらだだっぴろい海と空――眺^{なが}めていると、ボクの《魂》まで広がっていくような気がした。

呉羽^{くれは}パーキングを過ぎたあたりで、突如^{とつじょ}として正面^{くんじょう}に群青色をした連峰^{れんぽう}がそそり立った。能宗館長が「立山連峰^{たちやま}じゃのう」と大きな声を出し、シートに座^{すわ}っていたみんなが「おおお」と感嘆^{かんだん}する。その山並みはまるで X だった。凛々^{りんり}しくて、猛烈^{もうれつ}な底力を感じさせる威容^{いよう}が風景のなかで際立^{きわだ}っていた。ボクはしばらくその連峰に向かって走り続けた。

(きみは、いいな。しょっちゅう、動けて、いいな)
さっきの博物館のBX D三〇は、この海と山々を見たことがあるのだろうか。もしも、ないとしたら、これから先は見られるのだろうか……。そんなことを思うと、この瞬間、素敵な人たちに動かしてもらっている自分が、ほんのちよっぴりだけで幸福に思えてきた。

午後になっても空は青一色だった。

ハンドルをにぎる能宗館長は、親不知インターで高速を降り、しばらく山側へと向かってボクを走らせた。

次の表敬訪問先は、『電気化学工業』という会社だった。その会社の広大な敷地には石灰石を採るための鉱山がそびえ立っていて、ボクはそのふもとの空き地で停められた。

セミの叫び声が土砂降りみたいに空から降ってくる。すぐそばには澄明な川が流れていた。ボクは大三島の夏を憶う。

しばらくすると、山のうえの方から緑と水色のツートンカラーのボンネットバス、いすずTSD四〇が、ガタゴトと悪路を踏みしめながら降りてきた。そして、彼にもやはり『魂』があったのだった。

ボクらは並んで記念写真を撮ってもらった。

そして、その間、ずっと会話を楽しんでいた。

彼はいまでもバリバリの現役で、毎日、たくさんの鉱山労働者たちを乗せて一二メートルもある黒姫山を上り下りしているという。四輪駆動だが、車体のあちこちは錆び、凹み、ひどい傷がついていた。それでも、彼の『魂』はとても生き生きとしていた。ボクはそんな彼の車体を見ていたら、ふと、榎さんの手を思い出した。いつも傷だらけで、皮膚もごわごわで、ふしくれだっているけれど、最高の仕事をする働き者の手。魔法の手――。

別れ際、彼はこんなことをいった。

(オレはまだまだ走れるし、走らせてもらえる。山のうへは景色がいいし、空気もうまい。生まれてこのかた、この山から出たことはないけれど、オレはずっと幸せだ)

ボクも、これまでは幸せだったよ――、そういう残して、彼と別れた。

そして二日目のキャラバンは、柿崎インターの近くのホテルまで走って終了した。

三日目もまた、突き抜けるようないい天気だった。

北陸自動車道に乗って最初に停まったのは、米山サービスエリアだった。たまたま観光バスとなりに停車したこともあって、ボクの周囲にはすぐに人だかりができた。

今日は金曜日――観光バスに乗っていたのは、ほとんどがリタイア後の老人たちだった。

高井専務と高橋部長は、「このなつかしいバスが湯沢にくるんですよ」といいながら観光パンフレットをせっせと配ってまわっている。よく笑って、よく働く、いいコンビだ。

老人たちのなかに、ひとりだけ車椅子のおばあさんがいた。介護の女性につきそわれていて、ぼつぼつと会話を交わしてはいたけれど、でも、魂を半分抜かれていたみたいで、どこかぼんやりとした感じの表情をしていた。目に、生きる気力がほとんど宿っていないのだ。

ボクには、その気持ちが痛いほどわかった。自分の思いどおりに動けない人生――おばあさんはまさに、ボクとおなじ未来を歩もうとしているのだから。

わかるよ、わかる。

ボクは、おばあさんを見つめながら、共感と、同情の気持ちを向けていた。

ところが、そんなボクの鬱々とした感傷を、まるごと吹き飛ばすような発言をした人がいたのだ。能宗館長だった。

A

いきなり車椅子の前にしゃがみ込んで、能宗館長はおばあさんのしわしわの手をにぎった。B

おばあさんは、突然のことに目を丸くしていたし、介護の女性も不安そうな顔をしていたけれど、「C」と能宗館長は笑いかけた。

その笑顔につられてか、おばあさんの無気力だった顔に、ふっと明るい笑みが咲いたみたいだった。

D

そばにいた高井専務は、パンフレットの束を高橋部長にどさっとわたして、おばあさんのとなりに立った。

そして、能宗館長と高井専務に支えられるようにして、おばあさんは車椅子から立ち上がって、ボクのステップへと足をかけたのだった。

一段一段、交互に足を出して、のぼっていく。

ついさっきまで車椅子に座っていたとは思えないほど、その脚には力強さがあつた。

三人の重みを感じられるボクにはわかっていた——おばあさんはこのとき、ほとんど自力で立っていたのだ。しかも、座席に座ったとたん、背筋をしゃんと伸ばして持ち手にしっかりとつかまり、ボクのなかをとてなつかしそうな顔できよろきよろと眺めまわしたのだった。

「E」

能宗館長と高井専務は、外に出た。

介護の女性は、⁶ おばあさんの表情の変貌ぶりに啞然とした顔をしていた。

「母が、あんなにうれしそうな顔をしたのも、自発的になにかをしようとしたのも、本当に久しぶりのことです。どうもありがとうございます」

そういつて、丁寧に頭をさげた。

能宗館長は、うんうん、とうなずいた。そして、おだやかに諭すような口調でこういつた。

「こういうバスにはのう、人を笑顔にしたり元気にしたりするエネルギーが宿ってますけん。そういう大切な価値に気づかないまま、ただ古いモノだからちゅう理由で物置にしまい込んだり、捨ててしまったりするのはもったいないじゃろう。ほら、あのおばあちゃんの顔を見てみなさい」

娘さんは、窓の外から、おばあさんのしわしわだけどキラキラした笑顔を見つめた。

「ホント、幸せそうですねえ……」

つぶやいて、微笑み、そっと鼻の下に指をあてた。両目に、たっぷりの涙がたまっていた。

大切な価値に、気づかないまま——。

能宗館長のセリフが、ボクのなかにも突き刺さっていた。そして、それが刺激になって、⁷ ふたつのヘッドライトからウロコがぼろりぼろりと落ちた気がした。

運転手をどんどん替えながら、ボクは関越自動車道に入った。ゴールの湯沢町まであと少し。

そのまましばらく走って小出インターで高速を降りた。緑の山のなかをうねりながら延びる国道十七号線をゆっくりと走る。道路に沿ってとうとうと流れる清流は、まるで水面下に無数の宝石を抱え込んでいるのではないかと思わせるほど、午後の陽射しをキラリ、キラリ、とまぶしく照り返していた。

もう、ボクの大好きな海からはうんと遠ざかってしまったけれど、かわりに清々しい山の空気が味わえる。福山からはもっと離れてしまったけれど、新たに湯沢を楽しめばいいさ。

そう。ボクはついさっき、気づいてしまったのだ。

⁸ モノとして幸福に生きていく方法を。

たしかにボクは自由に『動く』ことはできないけれど、自由に『思う』ことも『感じる』こともできる。それは⁹ 唯一無二の現実であって、だれのせいでもない。だった——。

その現実をまるごと受け入れて、その先に見つけられる大切な価値に“気づき”ながら生きていけばいい。日常にある小さな幸せにひとつでも多く“気づき”ながら日々の幸福をかみしめていけばいいのだ。そして、それだけが、ボクがモノとして幸福に生きるための、たったひとつの術なのだと思った。

たとえば、いま、ボクのなかで、^{*}えびす顔の高井専務がこんなことをいった。

「館長さん、さっきはいいものを見させてもらいました。私も、あの精神でもって、このバスを大切に走らせます」

ボクは、こういう素敵な人たちにもらわれるという幸運に“気づいて”その幸せを堪能すればいいのではないか。そして、それが常にできてさえいれば、ボクはずっと『幸福なモノ』でいられるに違いない。

「ありがとうございます、専務。バスは走らせてなんぼじゃけ、どんどん乗ってやってください。で、もしもこのバスがこわれたら、それはうちの責任ですけ。いつでも博物館でしっかりと元どおりに直しますけん、安心してください」

これからボクは湯沢という高原の町で元気に走らせてもらえる。しかも、万一こわれてしまっても、大好きな福山のみんなに逢

平成二十八年 度 帝塚山中学校 一次A入学試験問題・国 語 (その七)

いにいける！

やっぱりボクは、幸福なバスだ。いや、そもそも、だれかに愛されて幸福だったからこそ《魂》が生じたのだった。そう、ボクはみんなに愛されている。

(森沢明夫『海を抱いたビー玉』より)

※表敬訪問……敬意を表すために訪れること。

※ボンネットバス……旧型のバス。

※マニア……一つのことについて特別熱中する人。

※刹那……瞬間。

※威容……他を庄するようないかめしい姿。

※ツートンカラー……二色を組み合わせた配色。

※榎さん……古くて壊れた車を修理・復元する職人であり、「ボク」も走れるようにしてもらった。

※リタイア……引退・退職すること。

※えびす顔……にこにこした顔つき。

※堪能……十分に味わうこと。

1 ——— 1 「驚いたこと」とありますが、「ボク」はどのようなことに驚いたのですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア いなかの博物館には不釣り合いなほど、駐車場が広がったこと。

イ 駐車場に停められたバスが「ボク」とまるでそっくりだったこと。

ウ 広い駐車場の真ん中にたった一台だけバスが駐車されていたこと。

エ 今では見かけない古い型のバスが、駐車場に停めてあったこと。

2 ——— 2 「キャラバン隊」とは、宣伝のために各地を回っている一団のことですが、彼らの最終目的地はどこですか。本文から三字でぬき出して地名を答えなさい。

3 ——— 3 「この博物館にも小さな奇跡が起きている」とありますが、ボクの言う「奇跡」とはどういうことですか。本文のこ とばを使って二十字以内で答えなさい。

4 ——— X に入る語として最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 大輪の花火

イ 大地の津波

ウ 青空の雲々

エ 群青色の連峰

5 ——— 4 「車体のあちこちは錆び、凹み、ひどい傷がついていた」とありますが、この様子が何を表していると「ボク」は感じて いますか。本文から十一字でぬき出して答えなさい。

6 ——— 5 「ボクの鬱々とした感傷」とありますが、具体的にはどのような気持ちですか。本文のことばを使って、「」の気持 ち。」に続く形で三十字以内で答えなさい。

7 ——— A E に入る会話として、最も適するものを、次の中からそれぞれ選んで答えなさい。

ア おお、それなら私もお手伝いしますよ

イ 昔はよう乗ったじやろ、こんなバスに。わしがいま乗せちやるけ、当時んこと、思い出して楽しんでください

ウ おばあちゃん、ラッキーな人じやのう！

エ ほんなら、おばあちゃん。ちよっとのあいだひとりにしちやるけん、じっくりと思い出にひたってください

オ 心配いらんて。のう、おばあちゃん、乗りたいじやろ？

8 ——— 6 「おばあさんの表情の変貌ぶり」とありますが、「能宗館長」は、「おばあさん」が変化したのはなぜだと考えていま すか。理由をのべた一文を探し、初めの五字をぬき出して答えなさい。

平成二十八年 度 帝塚山 中学校 一次 A 入学 試験 問題 ・ 国 語 (その八)

9 ——— 7 「ふたつのヘッドライトからウロコがぼろりと落ちた気がした」とは、ある慣用句をもとにした表現ですが、どのような意味の慣用句ですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア あることをきっかけに、突然ものごとの本質に気づいたさま。

イ 目は言葉と同じくらい、人の気持ちを伝えられるということ。

ウ 分からなかったことがなくなつて、安らかに落ち着いた心境。

エ 油断していた相手から、いきなりひどい目にあわされた様子。

10 ——— 8 「モノとして幸福に生きていく方法」とはどうすることですか。五十字以内で答えなさい。

11 ——— 9 「唯一無二」のような、漢数字をふくむ四字熟語になるように、次の ☐ に適する漢数字を答えなさい。

① ☐ 変 ☐ 化 ② ☐ 苦 ☐ 苦

12 本文の特徴を説明したものととして、正しいものには A、誤っているものには B と答えなさい。

ア 「ボク」の視点で物語を進めながら、必要に応じて周りの人物の視点も取り入れて語っているので、「ボク」だけでなく、それぞれの人物の心情も分かりやすくなっている。

イ 人物の会話には「。」を使っているが、バスの声には（ ）を使うことで、人間の耳には届かないところで交わされているバス同士の会話を区別して示している。

ウ 「石川県」や「北陸自動車道」といった具体的地名や、「濃紺色のゼリーみたいにべったりと風いだ日本海」といった比喻によって物語の舞台をイメージしやすくしている。

エ わかりやすいことわざや四字熟語をとどころに効果的に使って、この物語の主題である「幸福な人生」について、こうあるべきだと、読み手を教えみちびいている。

オ 物語の中に回想場面を組みこむことで、「ボク」が以前いた場所での思い出に別れを告げ、新しい土地であらたな人生を歩む決意をしたことを印象的にえがいている。

三、 次の 1 ～ 10 の ——— 部のカタカナを漢字に、 11 ～ 15 の ——— 部の漢字をひらがなに直しなさい。

1 夏休みには校庭をカイホウし、誰でも自由に使えるようにしている。

2 新入部員が最終回にギャクテンホームランを打つ活躍を見せた。

3 どちらかと言えば彼の意見をシジする人が多いようだ。

4 投票の結果、彼の意見はわずかな差でヒケツされた。

5 新しい校舎には冷暖房がカンビされているそうだ。

6 山を削って道路を作ることにはダンコとして反対していく。

7 先生が私に、絵画展で受賞したというロウホウを届けて下さった。

8 インターネットでの情報のカクサンには十分な注意が必要だ。

9 今日の国際社会では、国家間でキョウチヨウしていくことが求められる。

10 自転車で旅する兄は、東京をへて東北地方を目指しているところだ。

11 昔から「病は氣から」と言われている。

12 退職したら海外に移住しようかと思案している。

13 静かな海に船の汽笛がいつまでも鳴りひびいていた。

14 ケガをした彼は決勝戦の出場メンバーから外れることになった。

15 両親の声援に応えるように彼は大きく手を振った。

得 点

→

→

3
(1) 食料が

ということ。

[illegible]

7 サバンナに適應するには、

[illegible]

前頭前野を発達させる必要があったから。

二	1	
	2	

14	12	8
ア		
	↓	
イ		9
	↓	
ウ		
	↓	
エ	オ	
	↓	
オ		とき。
	13	10
		11

[illegible]

	7	8	9	10
A				
B				
C				
D				
E				

12	11
ア	①
	変
イ	化
	②
ウ	苦
	苦
エ	
オ	

三		
11	6	1
	ダン ン コ	カイ ホ ウ
12	7	2
	ロ ウ ホ ウ	ギ ャ ク テ ン
13	8	3
	カ ク サ ン	シ ジ
14	9	4
れる	キ ョ ウ チ ョ ウ	ヒ ケ ツ
15	10	5
える	へ て	カ ン ビ